

古筆切の年代測定 VI

— 加速器質量分析法による炭素14年代測定 —

池田 和臣
小田 寛貴

はじめに

池田と小田は共同研究として、国文学古筆切資料の書写年代を実証するべく、古筆切・古文書・古写経等の加速器質量分析法による炭素14年代測定を行ってきた¹⁾。新たに行った古文書・古写経の年代測定の結果を報告するとともに、これまで十五年に涉って行ってきた百点を超える炭素14年代測定の主な結果を一覧する。

はじめに加速器質量分析法による炭素14年代測定に接する人のため、古筆切および加速器質量分析法による炭素14年代測定についての概略を記して置きたいが、繰り返し旧稿²⁾に述べもしたし、紙幅を費やさぬためにも、それについては省略にしたがう。ついては、旧稿「古筆切の年代測定—加速器質量分析法による炭素14年代測定—」(『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月)、「続 古筆切の年代測定—加速器質量分析法による炭素14年代測定—」(『中央大学文学部紀要』二二九号、二〇一〇年三月)、「古筆切の年代測定Ⅲ—加速器質量分析法による炭素14年代測

定」(『中央大学文学部紀要』二三四号、二〇一一年三月)を参照されたい。

なお、執筆分担は、資料解説が池田、測定結果の分析が小田である。

I 書写年代が推定できる資料の年代測定

まず、内部徴証などによって書写年代の想定ができる資料について述べる。書写年代が推定できる資料は、炭素14年代測定の正確度・有効性を確かめることができ、貴重である。

伝安倍小水磨願経 貞観十三年(八七二)

安倍小水磨願経とは、「無災殃而不肖、無福樂而不成者、般若之金言、真空之妙典、被称諸仏之父母、聖賢之師範也、所以至誠奉写大般若経一部六百卷、三世大覚、十方賢聖、咸共証明、我現当之勝願、必定成就、貞観十三年^{歲次辛卯}三月三日、檀主前上野国大目從六位下安倍朝臣小水磨」の卷末願文をもつ大般若経である。上野国の豪族で大目に任ぜられた安倍小水磨が、所願成就のため発願書写させた大般若経と知れる。現在、埼玉県比企郡幾川村慈光寺に百五十二巻が伝存している。『古筆大辞典』(春名好重編、淡交社、一九七九年)は、「……卷子本、料紙は褐麻紙、……縦二五・六センチ、界は高さ二〇・五センチ、幅二センチ、虫喰いが多い。字形は方形にして端正であり、点画は勁健にして筆力、筆勢があり、巧妙に書写している。書風は天平経風で、謹厳にして明快である。……」とする。平安初期の関東における書写の大般若経として珍しい。

ここに安倍小水磨願経という書き付けをもつ写経の小片(架蔵)がある。「武蔵国比企郡 ち、ブ慈光寺什宝^{貞観十三年三月}若経 安部小水磨真跡」とある。写真版でわかるように、三行十字ほどの小片であるが、伝称どおりの安倍小水磨願経の年代、すなわち貞観十三年(八七二)の年代が出るかどうか、炭素14年代測定にかけてみた。

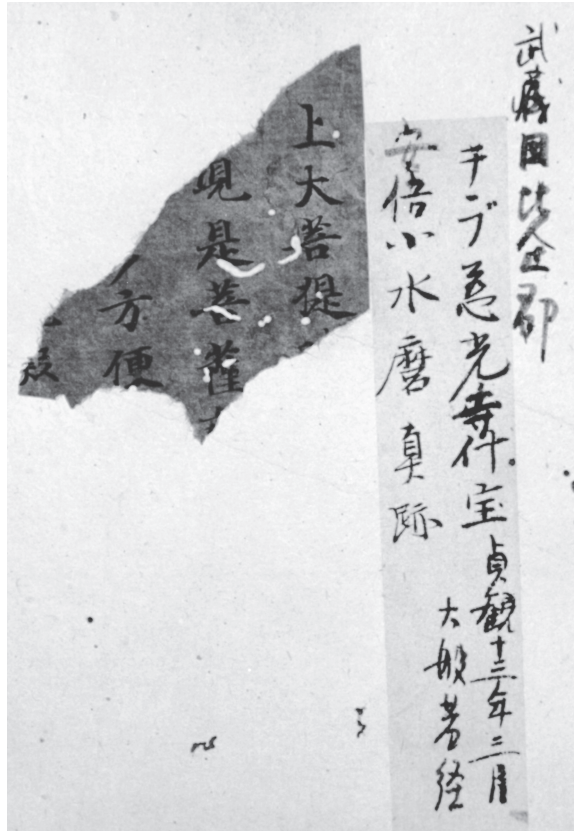


表1 伝安倍小水磨願経の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
1220 ± 23 (1σ)	772 (778)
± 47 (2σ)	784、786 ()
	828、839 ()
	703、706 ()
	784、765 (778) ()
	886
	885

古筆切の年代測定 VI (池田・小田)

測定結果は表1のとおりである。炭素14年代は1220「BP」で、この 1σ （一標準偏差）の誤差範囲1220 \pm 23「BP」をINTCAL09校正曲線により暦年代に校正した値が、772（778）784、786（828、839）865「cal AD」である。2 σ （二標準偏差）の誤差範囲1220 \pm 47「BP」を暦年代に校正した値が、694（703、706）784、765（778）886「cal AD」である。2 σ の誤差範囲は九五パーセントの確率でその中に実年代を含んでいるとされる。この2 σ の誤差範囲の中でも、炭素14年代1220「BP」を含んでいるのが、765（778）886「cal AD」の部分である。この部分は安倍小水磨願経が発願された貞観十三年（八七一）を含みこんでいる。この写経小片を伝称どおり安倍小水磨願経と見なしてよい測定結果といえる。

II 書写年代不明の資料の年代測定

次に、書写年代不明の資料の測定結果について述べる。

不明古記録切

ここに古記録の断簡（架蔵）と思われるものがある。料紙は楮紙。傷みが激しく、虫損・焼け・染み・黴がある。縦二六・八センチ、横五・九センチ。天地にそれぞれ一条の薄墨による界線が引かれている。巻皺が認められ、もと卷子本と思われる。次の三行が記されている。

人也者權左中弁重尹来觸主基雜事任
兩尚書轉任之後未忝結改又不著行事

所廿九日可著結改及行事所_{云々}

*「添」は「添」に同じ。

この本文と同一の本文をもつ古記録は検索できず、正体がわからない。しかし、筆跡がいわゆる和様体の漢字で、抑制が効いた結構と引き締まった筆線である。このような特徴をもった漢字の筆跡は、平安時代後半期のものと考えられる。筆跡の特徴どおり平安時代書写の古記録であるなら、わずか三行の断片といえ資料価値が大きい。それゆえ、炭素14年年代測定にかけてみた。

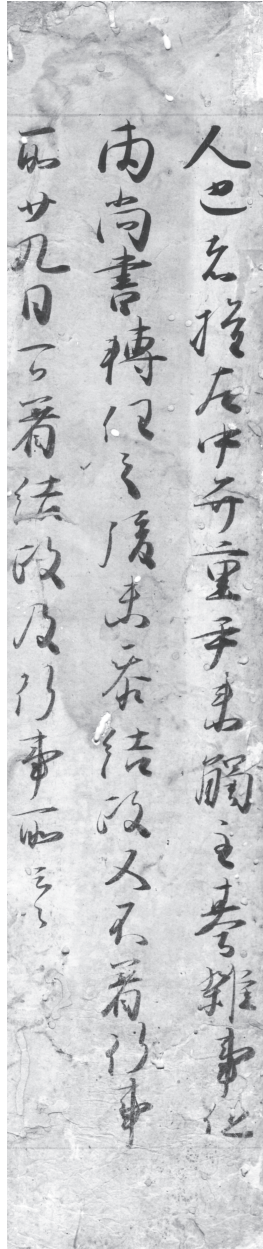


表2 不明古記録切の測定結果

炭素14年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
940 ± 20 (1σ)	1033 (1045), 1054, 1078 (1097), 1119, 114
± 40 (2σ)	2, 1147) 1153 1025 (1045), 1097, 1119, 1142, 1147) 1159

古筆切の年代測定 VI (池田・小田)

不明古記録切の年代測定の結果は表2のとおりである。炭素14年代は940「BP」で、この1 σ の誤差範囲940 \pm 20「BP」を暦年代に較正した値が、1033(1045)1054、1078(1097、1119、1142、1147)1153「cal AD」である。2 σ の誤差範囲940 \pm 40「BP」を暦年代に較正した値が、1025(1045、1097、1119、1142、1147)1159「cal AD」である。

これまでに行つた百点近くの炭素14年代測定の結果、一〇五〇年頃から一一八〇年頃までに書写された資料は、ほぼ同じ誤差範囲(一〇二〇年頃 \sim 一一七〇年頃)が出てしまふことが判明している。平安かな古筆のほとんどが高野切(一〇五〇年頃)以降院政期頃(一一五〇年頃)までに書写されたと推定されるので、炭素14年代測定はそれらの前後関係を明らかにし得ないことになる。同じ誤差範囲であっても、資料によってその真の年代は区々なのである。炭素14年代測定の限界である。

この不明古記録切の、九五パーセントの確率で真の値が含まれる誤差範囲も、一〇二五年から一一五九年であり、一〇五〇年頃から一一八〇年頃までに書写された資料ということになる。漢字の筆跡のありようから推測したとおり、平安時代書写の資料であつた。現存する平安時代の書写にかかる古記録は数少なく、貴重な資料といえる。

*

では、この古記録の正体はなんなのであろうか。たとえば『小右記』『権記』『御堂関白記』『左経記』『春記』『行親記』などの古写本の断簡なのであろうか。記事中の「權左中弁重尹」が示唆を与えてくれる。權左中弁重尹とは、後に示す『小右記』の記事などによって、藤原重尹のことと思われる。藤原重尹は永観二年(九八四)生まれ、永承六年(一〇五一)三月七日没の公卿。『公卿補任』によれば、長元二年(一〇二九)正月二十四日、参議。長元五年(一〇三二)従三位。長曆二年(一〇三八)正月五日、正三位。同六月二十七日、權中納言。長久三年(一〇四二)正月十二日、太宰権帥。同七月三日、従二位。

東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」で「重尹」を検索すると、『小右記』に一九五、『御堂関白記』に一四、『後二条師通記』に一、『仙洞移徙部類記』に一、『御産部類記』に三の記事を見出すことができる。まず、『小右記』にみえる藤原重尹の記事を粗々とたどってみよう。寛弘二年十一月十五日、左少将として登場する。

・寛弘二年十一月十五日 「左少将（藤原重尹・源濟政）」

・同 八年二月十五日 「右中弁重尹（藤原）」

・同 八年八月十六日 「主基行事（丹波）、右中弁重尹（藤原）」

「昨日被定宛者、左「右」中弁重尹来云、依被定主基行事所参来者」

寛弘八年（一〇一一）二月からは「右中弁」と記されるが、これ以降、寛弘八年八月・九月、長和元年（一〇一一）六月の記事まで、「右中弁」は続く。また、大嘗祭の主基の行事役に就いていたことが注意される。そして、長和元年八月十二日の記事に至り、「権左中弁」に転じている。

・長和元年六月四日 「右中弁重尹云、主基所史宣理日来、沈重病」

・長和元年八月十二日 「主基以右弁為行事、与「而」重尹転権左中弁、是本主基行事也」

「権左中弁」の呼称は、これ以降、長和元年（一〇一二）八月・九月、長和二年（一〇一三）三月・四月・五月、長和三年（一〇一四）一月・四月・五月、長和四年（一〇一五）四月・五月・十月、寛仁元年（一〇一七）七月・八月・十月・十一月・十二月、寛仁二年（一〇一八）四月、寛仁三年（一〇一九）九月・十月・十一月・十二月、寛仁四年（一〇二〇）九月・十月の記事まで続く。この間も、「権左中弁重尹（主基）、可為行事歟者」（長和元年八月十四日）、「主基重尹朝臣如元者」（長和元年八月十七日）などと、大嘗祭主基の行事役を務めていたことがわかり、注意される。そして、寛仁四年十一月二十九日以降、「左中弁」に転じている。

・寛仁四年十月二十五日 「権弁重尹」

・寛仁四年十一月二十九日 「大弁朝経、右大弁定頼、左中弁重尹、権左中弁経頼」

・治安元年一月一日 「章信（藤原）云、装束司左中弁重尹（藤原）重服、不可従事」

つまり、大嘗祭の主基の行事役を務めた藤原重尹が権左中弁であったのは、長和元年（一〇一二）八月十二日から寛仁四年（一〇二〇）十一月二十九日より前の間ということになる。ちなみに、『御堂閔白記』に重尹が現れるのは、寛弘元年五月二十七日の記事から長和五年十月十七日の記事までであるが、長和二年十二月十九日の記事以降「権左中弁」と呼称されていて、『小右記』と齟齬はない。

*

かくして、この不明古記録切の主基の行事にかかわって記されている権左中弁重尹は、『小右記』『御堂閔白記』などにみえる藤原重尹と考えて間違いなからう。それも、「権左中弁」の呼称からして、長和元年（一〇一二）八月十二日以降、寛仁四年（一〇二〇）十一月二十九日より前の期間のことを記した古記録ということになる。

さらに、断簡の「主基雑事任」という文言から、大嘗祭が行われた年の古記録と考えられる。主基は悠紀とともに、天皇の即位儀礼である大嘗祭において神饌料を献上する主基田だからである。重尹が権左中弁在任中に行われた大嘗祭は、長和元年（寛弘九年）（一〇一二）と長和五年（一〇一六）に限られ、『小右記』でも寛弘八年から長和元年（寛弘九年）にかけて——一条天皇は寛弘八年六月に没し三条天皇が即位したが、同年十月に冷泉上皇が没した——と、長和五年——一月に三条天皇退位、後一条天皇即位——に、大嘗祭の記事が集中してみられる。ということは、この不明古記録切も、寛弘八年から長和元年（寛弘九年）にかけて、あるいは長和五年の古記録の記事であり、『小右記』『御堂閔白記』『左経記』『行親記』あたりの佚文の可能性があろう。

また、大嘗祭の行事役を務める弁官（左右弁官局）は、太政官の内部官制では大納言の指揮下にある。ということとは、大嘗祭の行事役である重尹の報告を受けているこの古記録の執筆主体は、大納言もしくはそれ以上の公卿ということになる。ちなみに、寛弘八年から長和元年（寛弘九年）にかけての左大臣は藤原道長、右大臣は藤原顕光、大納

言は藤原道綱と藤原実資、権大納言は藤原齊信と藤原公任である。長和五年においても、以上の顔ぶれに権大納言藤原頼通が加わっただけである。寛弘八年から長和元年（寛弘九年）にかけても、また長和五年においても、弁官を指揮下におく大納言に藤原実資がいる。そして、この藤原実資の日記が『小右記』なのである。こうしてみると、この不明古記録切は『小右記』の佚文の可能性がもつとも高いと考えられる。

作品を断定することはできないが、寛弘八年から長和元年（寛弘九年）、もしくは長和五年の記事と思われる古記録の佚文断簡が、平安時代古写にかかるものであることが、炭素14年代測定で判明した。

Ⅲ 古筆切の年代測定 主な結果一覧

加速器質量分析法による炭素14年代測定の正確度・有効性を認識してもらうため、以下にこれまで池田と小田が十五年に涉って行ってきた炭素14年代測定の主な結果を一覧し、簡略なまとめを付す。

1 書写年代の明らかかな資料

1 「書写年代の明らかかな資料」では、研究や奥書などから判明している書写年代と炭素14年代を暦年代に較正した結果を示した。一標準偏差（ 1σ ）^{シグマ}によれば、その誤差範囲の中に真の炭素14年代が入る確率は約六八パーセント、二標準偏差（ 2σ ）によれば、その誤差範囲の中に真の炭素14年代が入る確率は約九五パーセントであるが、ここには 2σ の数値を示した。なお、書写年代が西暦一〇〇〇年より前のもの、一二〇〇年より前のもの、一二〇〇年以降のもので、ラインによって区切った。なお、1195（）1195のように、誤差範囲の上限と下限に同じ数値が示される場合は誤記ではなく、小数点以下を切り捨てたためである。

	資料名	書写年代	較正年代 (2σ)
1	東大寺二月堂焼経	天平一六年(七四四)	670(709、747、766) 777
2	大般若経	天長三年(八二六) 奥書	777(883) 897、
3	三摩地儀略次第	天曆一〇年(九五六) 奥書	922() 94 723() 739、770(781、
4	十卷本歌合	治暦四年(一〇六八)以前一〇年間	791、807) 889 1024(1048、1099、1119、
5	東大寺切三宝絵	保安元年(一一二〇)	1142、1147) 11160 1030(1053、1079、1153)
6	二十卷本歌合	大治元年〜二年 (一一二六〜一一二七)	1176 1023(1042、1107、1117)
7	中尊寺金銀交書経	永久五年〜天治元年 (一一一七〜一一二四)	1158 1019(1028) 1047、1090
8	今城切古今集	治承元年(一一七七) 奥書	() 1121、1139() 1149 1028(1049、1084、1124、
9	伝西行筆郭公切(五首切)	治承二年(一一七八) 成立	1137、1151) 1165 1029(1049、1084、1124、
10	伝西光筆かな消息	永万元年(一一六五) もしくは仁安三年(一一六八)	1137、1151) 1164 1155(1178) 1218
11	伝平業兼筆春日切実頼集	元久二年〜承元三年	1209(1223) 1267

12	明月記	(一一〇五)~(一二〇九)	1157 (1210)	1224
13	東大寺円親筆奥書切	建曆元年 (一一二一)	1169 (1219)	1263
14	春日日本万葉集切	天福二年 (一一三三)	1195 ()	1195、
		寛元元年~二年	1208 (1223)	1267
		(一一四三)~(一二四四) 奥書	1263 (1279)	1293
15	伏見天皇筆筑後切拾遺集	永仁二年 (一二九四)	1276 (1287)	1303、
16	奈良懷紙	文永末年 (一二七五)	1366 ()	1383
17	西園寺実兼自筆詠草切	正応三年 (一二九〇)	1279 (1291)	1309、
		頃	1361 ()	1386
18	権少僧都信懷筆因明問答	正和四年 (一二三五)	1282 (1296)	1318、
			1352 ()	1390
19	清原俊宣申文案	延慶二年 (一二三〇)	1285 (1300)	1323、
		二月一日	1346 (1368、	381)
20	中院宣胤筆奥書切	文龜元年 (一二五〇)	1465 (1513)	1530、
21	冷泉政為(晧覚)懷紙	永正一〇年 (一五一三)	1539 (1600、	1616)
			1644 (1516、	1596、
		大永三年 (一二五三)	1640	1618)
22	後奈良天皇詠草	大永七年 (一二五七)	1477 (1523、	1560、
			1572、	1630)
			1643	1561、

2 書写年代不明の資料

2 「書写年代不明の資料」では、1から3の三点は二標準偏差(2σ)の炭素14年代とそれを暦年代に較正した結果を示し、それ以外は二標準偏差(2σ)の炭素14年代を暦年代に較正した結果のみを示した。

また、較正年代の上限が西暦一〇〇〇年より前のもの、較正年代の上限が一〇〇〇年より後で下限が一二〇〇年より前のもの、較正年代の上限が一〇〇〇年より後で下限が一二五〇年より前のもの、較正年代の上限が一〇〇〇年から一二〇〇年までで較正年代の下限が一二五〇年より後のもの、較正年代の上限が一二〇〇年より後のもの、この順にラインによって区切った。

資料名

炭素14年代

較正年代(2σ)

1	伝藤原行成筆佚名本朝佳句切	1 1 0 4 ± 4 1	(2σ)	8 8 9	(9 0 3、9 1 5、9 6 8)	9 9 1		
2	草がち未詳歌切	1 0 4 3 ± 4 7	(2σ)	9 1 0	()	9 1 0、9 7 2	(9 9 6、1 0 0 5、1 0 1 2)	1 0 2 4
3	伝小野道風筆詩書切	1 0 0 4 ± 4 0	(2σ)	9 9 3	(1 0 2 2)	1 0 3 5		
4	伝藤原佐理筆敦忠集切	1 0 1 6	(1 0 2 5)	1 0 4 4、1 0 9 8	()	1 1 1 9、1 1 4 2	()	1 1 4 7
5	伝源俊頼筆(推定藤原定実筆)卷子本古今集切	1 0 2 0	(1 0 3 2)	1 0 5 2、1 0 8 0	()	1 1 2 9、1 1 3 2	()	1 1 5 3
6	伝宗尊親王筆如意宝集切	1 0 2 8	(1 0 4 8、1 0 8 7、1 1 2 2、1 1 3 8、1 1 5 0)	1 1 6 2				
7	伝小大君筆香紙切麗花集	1 0 2 9	(1 0 4 9、1 0 8 4、1 1 2 4、1 1 3 7、1 1 5 1)	1 1 6 4				

- 8 伝紀貫之筆元暦校本万葉集切
1 0 3 6 (1 0 5 4、1 0 7 7、1 1 5 4)
1 1 6 8
- 9 伝西行筆未詳歌集切(二首切)∴長寛三年(一一六五)頃
1 0 2 0 (1 0 3 4) 1 0 5 8、
1 0 7 5 () 1 1 5 4
- 10 伝西行筆歌苑抄切∴承安四年(一一七四)以前成立
1 0 2 9 (1 0 4 9、1 0 8 4、1 1 2 4、
1 1 3 7、1 1 5 1) 1 1 6 3
- 11 藤原俊成筆了佐切古今集
1 0 2 9 (1 0 5 2、1 0 8 1、1 1 2 7、
1 1 3 4、1 1 5 2) 1 1 7 4
- 12 伝飛鳥井雅経筆金銀切箔朗詠集切∴藤原教長筆
1 0 3 2 (1 0 5 4、1 0 7 8、1 1 5 3)
1 1 7 7
- 13 伝源通親筆狭衣物語切
1 0 4 1 () 1 1 0 8、1 1 1 6 (1 1 5 1)
1 2 0 9
- 14 伝資経筆堀河院百首切
1 0 4 1 () 1 1 0 8、1 1 1 7 (1 1 5 9)
1 2 1 3
- 15 伝寂然筆村雲切貫之集
1 0 4 5 () 1 0 9 5、1 1 2 0 ()
1 1 4 1、1 1 4 7 (1 1 6 0) 1 2 1 4
- 16 伝寂蓮筆新古今集切
1 0 4 6 () 1 0 9 2、1 1 2 0 ()
1 1 4 0、1 1 4 8 (1 1 6 0) 1 2 1 3
- 17 伝藤原定頼筆山城切和漢朗詠集
1 0 4 9 () 1 0 8 4、1 1 2 4 ()
1 1 3 7、1 1 5 1 (1 1 6 4) 1 2 1 6
- 18 伝藤原俊成筆御家切古今集
1 0 5 2 () 1 0 8 1、1 1 2 8 ()

19	伝飛鳥井雅経筆古今集切	1	1	3	3、	1	1	5	2	(1	1	7	1)	1	2	1	9
20	伝藤原家隆筆中院切千載集	1	1	6	3	(1	2	1	5)	1	2	5	7				
21	伝藤原秀能筆三宅切新勅撰集(一二三二頃成立)	1	1	6	5	(1	2	1	7)	1	2	6	2				
22	伝藤原定家筆大式高遠集切	1	1	8	3	(1	2	2	1)	1	2	6	5				
23	伝称筆者不明源氏人々心くらべ	1	2	0	9	(1	2	2	1)	1	2	6	4				
24	伝藤原家隆筆升底切金葉集	1	2	1	3	(1	2	5	5)	1	2	7	2				
25	伝慈円筆円山切新古今集	1	2	1	5	(1	2	5	7)	1	2	7	4				
26	伝九条道家筆備中切新古今集	1	2	1	9	(1	2	6	4)	1	2	8	0				
27	伝世尊寺経朝筆玉津切蜻蛉日記絵巻	1	2	2	5	(1	2	7	0)	1	2	8	2				
28	伝藤原家隆筆柘枝切万葉集	1	2	7	1	(1	2	8	3)	1	2	9	6				
29	伝俊鳥羽院筆水無瀬切新古今集	1	2	7	1	(1	2	8	4)	1	2	9	8、				
30	伝藤原顕輔筆鶉切古今集	1	3	7	0	(1	3	7	9								
31	伝世尊寺行俊筆長門切	1	2	7	2	(1	2	8	4)	1	2	9	9、				
32	伝亀山天皇筆金剛院類切	1	3	6	9	(1	3	8	1								
33	伝尊円親王筆金沢文庫切万葉集	1	2	7	3	(1	2	8	4)	1	2	9	9、	1	3	7	0
		1	3	8	0						(
		1	2	8	2	(1	2	9	6)	1	3	1	8、				
		1	3	5	2	(1	3	9	0								
		1	2	9	1	(1	3	1	1、	1	3	5	9、	1	3	8	7)
		1	4	0	2													

34 伝俊寛筆三輪切古今集

1 2 9 7 (1 3 1 3) 1 3 3 1、

1 3 3 8 (1 3 5 7) 1 3 7 5、

1 3 7 5 (1 3 8 8) 1 3 9 7

35 伝藤原行能筆源氏物語切

1 2 9 8 (1 3 1 9、1 3 5 1) 1 3 7 1、

1 3 7 8 (1 3 9 0) 1 4 0 5

36 伝西行筆塙正切源氏物語

1 3 0 0 (1 3 2 3、1 3 4 6) 1 3 6 8、

1 3 8 1 (1 3 9 2) 1 4 0 9

37 伝藤原俊成筆顕広切古今集

1 3 0 9 () 1 3 6 1、1 3 8 6 (1 3 9 9)

1 4 2 5

38 伝小野道風筆絹地切

1 4 0 1 (1 4 1 5) 1 4 3 3

39 伝藤原為家筆短冊

1 4 5 4 (1 4 8 8) 1 5 2 4、

1 5 5 8 (1 6 0 4、1 6 0 8) 1 6 3 1

IV ま と め

二〇一四年三月までに池田と小田の共同研究として行った炭素14年代測定の資料は一〇〇点余^③。そのうちの六一点の測定結果を示してみた。これらから言えることを簡略にまとめておく。

* 書写年代の明らかな資料は、書写年代がほぼ誤差範囲に含まれており、年代測定の正確度の高さが保証される。I—3 三摩地儀略次第・8 今城切古今集・9 伝西行筆郭公切(五首切)は古紙に書かれているのであろうと推察される。特に3 三摩地儀略次第はかなりの古紙で、紙背を用いた仏書などにはかかる例のあることを留意しておきたい。また、I—8 今城切古今集・9 伝西行筆郭公切(五首切)、II—9 伝西行筆未詳歌集切(二首切)・10 伝西行筆

歌苑抄切などから、平安最末期の動乱期には紙の調達が難しく、いささか古い紙が少なからず使用されたことがうかがえる。

*Ⅱ—1 伝藤原行成筆佚名本朝佳句切・2 草がち未詳歌切・3 伝小野道風筆詩書切などは、一〇五〇年頃（高野切）より古い時代の希少な古筆資料であることが科学的に証された。

*一〇五〇年頃から一一八〇年頃までに書写された資料は、ほぼ同じ誤差範囲（一〇二〇年頃～一一八〇年頃）が出てしまう。平安かな古筆のほとんどが高野切（一〇五〇年頃）以降院政期頃（一一五〇年頃）までに書写されたことと推定されるので、炭素14年代測定はそれらの前後関係を測れないことになる。炭素14年代測定法の限界である。たとえば、同じ誤差範囲のものでも、国文学や書跡史の知見によりⅡ—4 伝藤原佐理筆敦忠集切・5 伝源俊頼筆（推定藤原定実筆）卷子本古今集切・6 伝宗尊親王筆如意宝集切・7 伝小大君筆香紙切麗花集・8 伝紀貫之筆元暦校本万葉集切は誤差範囲の前半に、Ⅱ—9 伝西行筆未詳歌集切（二首切）・10 伝西行筆歌苑抄切・11 藤原俊成筆了佐切古今集・12 伝飛鳥井雅経筆金銀切箔朗詠集切は後方にあると判断できる。同じ誤差範囲でも、資料によってその真の年代は区々の結果となる。

*誤差範囲の上限が一〇四〇年頃までさかのぼるが、下限が一二〇〇年代初めまで下がってしまう一群（Ⅱ—13 伝源通親筆狭衣物語切・18 伝藤原俊成筆御家切古今集）がある。これらは、誤差範囲の下限、一一八〇年頃から一二〇〇年頃に真の年代があると推測される。そうではあっても、13 伝源通親筆狭衣物語切は最古の狭衣物語の断簡といえる貴重な資料である。

*一一〇〇年代半ば以降から一二〇〇年代中頃までの誤差範囲をもつ一群（Ⅱ—19 伝飛鳥井雅経筆古今集切・22 伝藤原定家筆大式高遠集切）がある。それらは、Ⅱ—21 伝藤原秀能筆三宅切新勅撰集の例から、（ ）内の炭素14年代の近辺に真の年代がある確率が高い。

*従来考えられていた書写年代を訂正しなければならぬ名筆がいくらかある。Ⅱ—29 伝後鳥羽院筆水無瀬切新古今集・30 伝藤原顕輔筆鶉切古今集・34 伝俊寛筆三輪切古今集・35 伝藤原行能筆源氏物語切・36 伝西行筆塙正切源氏物

語・37 伝藤原俊成筆頭広切古今集は、これまでの書道史の通念と異なる結果である。それぞれが、考えられていた程古いものではなかった。37 頭広切は俊成若書きではない。29 水無瀬切・30 鶉切・34 三輪切・36 塙正切も、伝承筆者の時代より後の筆跡であることが科学的に証された。

注

- (1) 池田和臣・小田寛貴「加速器質量分析法による古筆切および古文書の14C年代測定」(『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XII)』名古屋大学年代測定総合研究センター、二〇〇一年三月)、池田和臣「加速器質量分析法による古筆切および古文書の14C年代測定」(『中央大学文学部紀要』一八九号、二〇〇二年二月)、小田寛貴・池田和臣・増田孝「古筆切・古文書のAMS14C年代測定―鎌倉時代の古筆切を中心に―」(『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XV)』名古屋大学年代測定総合研究センター、二〇〇四年三月)、池田和臣「古筆切の年代測定について―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年)。池田和臣・小田寛貴「続古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅲ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅳ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二九号、二〇一二年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅴ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二四九号、二〇一四年三月)など。

- (2) 池田和臣「古筆切の年代測定について―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『平安文学の新研究物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年九月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月)。池田和臣・小田寛貴「続古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二九号、二〇一〇年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅲ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二三四号、二〇一一年三月)。

- (3) 注(1)に同じ。

付記

本稿には取り上げなかった測定結果、および現在測定中の資料の結果を加えて、近々、古筆切を中心とした和紙資料の炭素14年代測定を一書にまとめる予定である。

謝辞

本稿において報告した古筆切の炭素14年代は、パレオ・ラボ Compact-AMS (CAMS-500⁺、アメリカ NEC 社製 1.5SDH)、名古屋大学タンデトロン (Model4130-AMS、オランダ HVEE 社製) によって測定されたものである。株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤茂氏、安昭炫氏、佐藤正教氏、廣田正史氏、山形秀樹氏、小林紘一氏、Zaur Lomtadze 氏、Ineza Jorjiani 氏には炭素14年代測定を行うに当たり大変お世話になりました。心より感謝いたします。

なお、本研究は文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B)、(課題番号…24300301、研究代表者…小田寛貴)の一部を用いた成果である。記して、感謝いたします。